

『横浜の女性宣教師たち』出版記念会

岡部 一興

今年の3月『横浜の女性宣教師たち』を有隣堂から出版、皆さんと共に喜びたい。考えてみれば、4年前のこと、1月の研究会終了後、安部純子さんが女性宣教師の本を出したいと発言したのがこの書を編纂する契機となった。

横浜プロテスタント史研究会、略して「横プロ研」は、1981年9月19日高谷道男先生が「ハリスについて—日本宣教への功績」を發表、その初めは横浜における宣教師の研究ということで始まったが、その後、研究領域が広がってキリスト教史全般になる。出版物としては、88年には太田愛人先生編『外人墓地に眠る人びと』（キリスト新聞社）、92年『図説横浜キリスト教文化史』、2008年には『横浜開港と宣教師たち—伝道とミッション・スクール』を刊行（3版まで）。考えてみると、女性宣教師を扱った書物はない。その意味で注目されている。なぜこれほど多くの女性宣教師が来日したのか。まず、この事を追求したい。

1. アジア伝道

アジアにおいてプロテスタント伝道の契機をつくったのは、1795年の宣教事業団ロンドン宣教会で、創立総会においてホーウィスが演説。これより2年前には、インド・カルカッタにウィリアム・ケアリーが上陸、1807年にはロンドン宣教会のモリソンが中国の広東に来航、この動きはアメリカに飛び火し、1810年ニューイングランドの会衆派が中心となってアメリカ海外伝道局が結成された。

2. アメリカからもたらされたキリスト教

アメリカにキリスト教が伝えられたのは、1620年メイフラワー号でニューイングランドへ渡ったピルグリム・ファーザーズに始まるといってよいだろう。18世紀後半ジョージ・ホイットフィールド、ジョンサン・エドワードなど有力な説教者が登場、ニューイングランドからニューヨーク、ペンシルヴェニア

等の州に第一次信仰覚醒運動が展開。19世紀から第二次大覚醒が起こり中心人物はチャールズ・G・フィニーで、この動きはリバイバル説教者ドワイト・ムーディに引継がれ、彼はシカゴでYMCAの会長となり頭角を現し、のちのリバイバル説教者であるビリー・サンディやビリー・グラハムまで引き継がれていく。

1823年アメリカ大統領モンローがアメリカ大陸とヨーロッパ大陸との相互不干渉を説いた「モンロー宣言」を發し、専らアメリカ大陸内部に関心が集中。1845年ジョン・オサリヴァンが「明白な運命」を發表、西部の買収、開発が進展、こうした西漸運動は神から与えられた使命だと言い、独立戦争後、1803年ルイジアナ、フロリダを買収、1845年テキサスを併合し、フロンティア精神が終りに近づくとき海外に目を転じ、1898年米西戦争に勝利、フィリピン、グアム、プエルトリコを獲得、この年ハワイを併合。そして国内産業が進展し、大西洋と太平洋を結ぶ鉄道が直結。1885年オハイオ州シンシナティの会衆派牧師J・ストロングは『わが祖国』を出版、ベストセラーとなり、非キリスト教国の国民に伝道することは神から託された使命であると言う。やがてフロンティア精神は消滅するが、その流れは海外へと波及、海外伝道が熱を帯びて全盛期を迎え、このような流れの中で沢山の宣教師がアメリカから来日した。

3. 日本にもたらされたキリスト教

モリソン号事件

日本宣教の契機となったのはモリソン号事件で、ギュツラフがマカオで1832年遠州灘で遭難し助かった岩吉、久吉、音吉を使って日本語訳聖書の翻訳に取掛り、1837年に『約翰福音之伝』、『約翰上中下』の翻訳を完成。同年7月輸送の事情から聖書を船に乗せる事はできなかったが、S・W・ウィリアムズ、医師のパーカー、キング夫妻、7名の漂流民を乗せて浦賀湾に到着。しかし、異国船打払令によって上陸することができず、マカオに戻る。

同船したキング支配人はアメリカ合衆国政府にこの事件を報告、また『モリソン号の日本來航記』をアメリカで出版し世論を沸かせた。

カトリックの再布教

日本にはじめてキリスト教が伝えられたのは、1549年8月東洋の使徒と言われるイエズス会のフランシスコ・ザビエルが来日したことにはじまる。1601年ヴァリニャーノの書翰によると、キリシタン数は30万人と急速に伸び、その後も教勢が上がった。しかし、1612年江戸幕府によるキリシタン禁令によって、息の根を止められた。

開国前のこととしては、1844年5月4日（天保15年3月31日）パリ外国宣教会が、フランスのインドシナ艦隊司令官セーシュの援助を得て、テオドール・フォルカードと中国人アウグスチノを琉球那覇に派遣、2年間滞在したが、隔離されて伝道できなかった。その後1846年イギリス海外琉球伝道会ベッテルハイムが琉球に赴き、新約聖書を琉球語に翻訳、迫害にあいながら布教し、受洗者も出た。1858年10月9日（安政5年9月3日）、全権大使グロー男爵と幕府の間で、「日仏修好条約」を調印。翌年ジラル神父が日本教区長代理に任命され、1862年1月12日（文久元年12月13日）横浜に天主堂を建設、物珍しさもともなって見物人が多く集まり、神奈川奉行は天主堂を襲って33名を拘禁する事件が起こった。（63年2月18日、文久2年1月20日）。1865年には、大浦天主堂で潜伏キリシタンが先祖伝来の信仰を告白する事件が起こった。1873年2月、カトリックはキリシタン禁令の高札撤廃前後から修道士と修道女の来日を計るようになり、1872年幼きイエズス会のサン・マティルドの修道女の団で、日本最初の修道院と孤児院や女学校を設立した。その後修道会が数知れないほどつくられ、その修道会が教育、医療、社会福祉の分野で活動した。

開国・開港

1853年ペリー来航、日米和親条約締結。1856年8月初代アメリカ総領事としてハリスが下田に着任、1858年7月29日（安政5年6月19日）に日米修好通商条約を締結。神奈川、長崎、新潟、兵庫の開港と江戸・大坂の開市、通商は自由貿易とすること、開港場に居留地を設けること等の条約を結んだ。続いて、イギリス、フランス、ロシア、オランダ、との間に修好通商条約を結んだ（安政の5カ国条約）。ハリスは、条約の中で、居留地の中で礼拝を

することができる宗教条項第8条を承認させた。

宣教師の来日と第1回宣教師会議

1858年11月ハリストス正教会マアホフが函館領事館付司祭として来日、1861年ニコライへの上陸。1859年5月米国監督教会J・リギンズ、6月C・M・ウイリアムズが長崎に上陸。10月米国長老教会J・C・ヘボン夫妻が神奈川に、11月米国オランダ改革派教会S・R・ブラウンとD・B・シモンズが神奈川に、また同月にG・F・フルベッキが長崎に上陸。1860年4月フリー・バプテスト派宣教師ジョナサン・ゴープル、1961年11月にはJ・H・バラ夫妻が同じく成仏寺に留まった。日本基督公会（現横浜海岸教会）創立期の1872年3月日本基督公会成立後、同年9月ヘボンの横浜居留地39番において第1回の宣教師会議が開催された。最終的に出席した宣教師は、米国長老派、米国オランダ改革派、Congregationalといわれる後の組合派が中心であった。この会議で、①聖書翻訳の共同委員制、②教派によらざる神学校の開設、③無教派主義による教会形成、他に讃美歌の編纂が決まった。無教派主義による教会形成については激論となったが、ベテラン牧師のS・R・ブラウンのリードによって何とか一致。しかし、無教派の教会形成は走り出したが、失敗に終わった。

4. 横浜で活躍した女性宣教師たち

さて、この書の副題にありますように、開港から戦後復興、つまり1859年から約100年の間にどのくらい女性宣教師が来日したかということ、圧倒的に男性宣教師より女性宣教師の方が多いためである。この書の巻末のリストには、この100年間で256名の女性宣教師が横浜に来た。しかも、プロテスタントの場合でみると、圧倒的にアメリカからの宣教師が多いこと。

日本のプロテスタント・キリスト教はアメリカの宣教師によってもたらされた。1883（明治16）年のプロテスタント諸派の在日宣教師大会の報告では、日本伝道の最初の23年間に来日した宣教師の大半はアメリカ人であり、その数は313人にのぼる。その内訳は男性127人、女性186人で女性宣教師が圧倒的に多かった。

『横浜の女性宣教師たち』を今回出版するにあたり、1859年の宣教師来日から戦後復興の1960年頃までの100年間で、256名の女性宣教師が来日している。そのうち48名の女性宣教師をピックアップし

て叙述し、それも事典では面白くないので、女性宣教師の生きざまをリアルに描くようにした。それでは、なぜ女性宣教師が多いのか。キリスト教伝道という視点から見た場合、大きく分けて二つのことが言えると思う。一つは神の言葉を宣べ伝え、教会を建設することにある。神の言葉を伝えるには聖書の翻訳が必要であり、神の言葉を伝えるために神学校を作り牧師を養成する。この面では圧倒的に男性宣教師が主導権を握り、第一義的な役割を男性宣教師が果たすのである。二つ目は教育事業、社会事業、慈善事業という社会文化的活動を女性宣教師が担ったのである。この分野には男性宣教師も入ってきたが、圧倒的に女性宣教師がこの分野で活躍する。女性宣教師は牧師への道が閉ざされていたので、いわば第二義的な活動に携ることになった。

結びにかえて

海外伝道をめざす女性たちは、同じ意志を持つ男性と現地へ赴き、「準宣教師」として働いた。宣教師夫人は英語塾を開き、家事をこなし夫の伝道を助け、現地の女性とコンタクトを取るなどの働きをした。当時女性宣教師は、牧師になる道は閉ざされていたので女性が力を発揮できるのは、英語教育や音楽教育、福祉などを通して自らが体験した福音の喜びを伝えることにあった。その場合、宣教師夫人より独身女性の方がより専門的な分野で活躍できることから高等教育を受けた多くの女性宣教師がミッション・スクールを設立し、そこで働いたのである。彼女らは、日本社会に認められる学校にするにはどうしたらよいか心に砕き、同時に新しい女性の生き方を示し、日本の教育にインパクトを与えた。横浜ではフェリス女学院、横浜共立学園、捜真学院、横浜英和学院、横浜雙葉学園としてその歴史をとどめ、宣教師たちは日本の土となって学校を運営し、伝統ある女学校として高い評価を受けている。

付記

キリスト教学校教育同盟という組織がある。プロテスタント系のキリスト教主義学校が加盟する団体で、加盟学校法人は102法人。そのうち女学校は半分を超えている。プロテスタント系の学校に学ぶ生徒、学生数は、344,985名(2016年)に上り、そのうち女子は204,612名で圧倒的に女子が多い。中高でみると、女子59,048名、男子33,971名である。(他

に日本カトリック学校連合会・高校だけでも109校)

出版記念会：5月19日(於：横浜指路教会)

※横浜プロテスタント史研究会篇・有隣堂 『横浜の女性宣教師たち—開港から戦後復興の足跡』
2018年3月10日、定価2,300円+税 著者割引2,000円(事務局まで連絡下さい)

横浜における女子修道会活動のはじまり

中島 昭子

1 はじめに

『横浜の女性宣教師たち』(以下『女性宣教師たち』)第6章の概要と資料の所在などについて発表した。特に、カトリック教会がパリ外国宣教会(以下MEP)に指示して日本の再宣教に着手した経緯、MEPが招聘来日した女子修道会が取り組んだ教育・社会事業の初期の活動を主な課題とする。幕末維新期のカトリック宣教を独占的に担ったMEPはフランス語を母語とする在俗司祭の宣教会で、会員は殆どフランス人である。このため来日した修道会も当初はフランスで設立された会が多い。

2 「宣教の春」と日本再宣教の起点

大航海時代の宣教がポルトガルやスペインの国家事業の一環として展開されたのに対し、欧米諸国の市民革命を経て迎えた19世紀「宣教の春」時代、ローマ教皇から任命されたMEPなどの宣教師がアジアやアフリカに派遣された。

新しい宣教地での最初の活動は男性宣教師によったが、教育や社会事業分野に進出する際には女子修道会が協力した。これが19世紀の大きな特色である。汽船や鉄道など交通機関の進歩や植民地化の進行と関係があることも否定できない。

また、信徒のいない地域への宣教にかかる莫大な費用を、欧米の一般信徒と宣教地在住の欧米人の献金が支えた。このために支援団体が多数誕生した。例えば、信仰弘布会は週1スーの献金を外国宣教のために広く集めた最大の会であり、幼きイエズス会は異教徒の子どもたちを助ける活動に献金を募り、学校や孤児院などの建設や運営の資金にあてられた。

そもそも日本再宣教の起点はどこか。日仏修好通商条約締結と横浜開港により、1859年MEPのジラルールがフランスの駐日外交官通訳として、9月

江戸に上陸、10月神奈川に入った。ジラルは1862年1月横浜天主堂を献堂した。幕府による厳しい弾圧で日本各地の教会堂が破壊されてから200年余の歳月を経て、開国後最初のカトリック聖堂が横浜に建設されたのである。カトリック教会は、この天主堂献堂を再宣教の端緒と捉えている。

この再宣教には前史がある。1831年、カトリック教会は鎖国日本も視野に入れて、朝鮮半島にMEP宣教師を派遣したが、同地でもキリスト教弾圧が激しく、日本渡航はかなわなかった。次いで1844年からフォルカードが琉球に滞在、1846年教皇庁は日本代牧区を設置した。しかし彼も日本上陸を果たせなかった。その後も、宣教師は琉球で語学を学び、日本への道が開かれるのを待ったのである。

再宣教には奇跡的な出来事が伴った。1865年大浦天主堂での潜伏キリシタンの信徒発見である。浦上四番崩れなどの弾圧もあり、再宣教は長崎を中心に展開したように見えるが、日本は単一の代牧区であり、責任者ジラルが住む横浜が活動拠点であった。1866年司教に叙階されたプティジャンも、司教座を置いた横浜に最初的女子修道会を招聘して宣教の将来を描き、1873年キリシタン禁令高札の撤去を迎えたのである。

3 女子修道会の活動

①女子修道会の来日

明治初期から戦前までに来日した女子修道会は、『女性宣教師たち』に掲載した26会である。若干の説明を付加しておく。厳律シトー会はいわゆるトラピスティヌだ。ヌヴェール愛徳修道会はフォルカードが帰仏後司教を務めていたヌヴェールでルルドのベルナデッタを入会させた会である。学校・幼稚園・孤児院・乳児院・病院・高齢者施設などの運営に関わっているケースが多い。なお、239頁5行目の聖心侍女修道女会は聖心侍女修道会の誤りである。お詫びし、訂正をお願いしたい。

太平洋戦争前に横浜で活動したのは、幼きイエス会（ニコラ・バレ）とマリアの宣教者フランシスコ修道会である。横浜において、前者は雙葉学園の設立、後者は横浜一般病院での活動で知られる。両会とも国籍も様々な数多の修道女が横浜で活動したが、『女性宣教師たち』では最初の修道院長のみを紹介した。

②幼きイエス会（ニコラ・バレ）

同会の通称はサン・モール会である。17世紀のフランスでバレ神父によって貧しい子どもたちの教育を目的に設立され、革命後はアジア・南米・アフリカなどにも活動を広げた。メール・マティルド（マリ・ジュスティエヌ・ラクロ）と4人の修道女を横浜に派遣されたのは、明治政府が禁令高札を撤去する1年前の1872年であった。

因みに、マティルドは修道名、フランス語のメールは英語のマザーの意味で、修道院長の敬称である。また、修道女は英語ではシスターだが、フランス語ではマ・スールだ。なお、マティルドの故郷ラングル司教区は、男女共に多くの宣教師を輩出した。日本に派遣されたMEPのアルンブリュステヤテストヴィドも同司教区の出身である。

フランスからアジアに赴く宣教師は、ルアーヴル・ポルドー・マルセイユから地中海を東へスエズに向かう。19世紀後半に運河が開通するが、それ以前は地峡を馬車などで紅海に出る。そこからインド・東南アジアさらに中国・日本へ何度も船を乗り換えて移動した。

マティルドは1852年マレー半島に渡って活動を始めた。来日前にすでに20年の宣教経験があったことになる。マティルドにプティジャン司教からの来日要請書簡が届いたのは1872年5月19日であった。折しも前日シンガポール・ヨーロッパ間の電信が開通していた。マティルドはこの文明の利器を用いてパリに打診、21日修道会本部から「ウイ」を受信した。電信の料金は高額であるから一言であったのだろう。

すぐに4人の修道女を伴って横浜へ向かった。香港で船を乗り換え、18日間の旅である。6月28日に到着、日本に初めて修道女が上陸した。すぐに山手居留地に修道院を開き、病人や孤児のための活動が外国人居留地と横浜道沿いに行われた。修道院建設には長崎外海での活動で有名な宣教師ド・ロが関わった。

1900年、現在の雙葉の前身、紅蘭女学校が設立された。学園の歴史は詳しい資料があるので、ここでは触れない。1911年、マティルドは横浜で帰天、39年を日本に捧げた最初の修道女の葬儀は、本人の希望で質素であったことのみ付加しておく。

③マリアの宣教者フランシスコ修道会

19世紀後半マリ・ド・ラ・パッションによってインドで設立された、フランシスコ会律修第三会であ

り、国際的な宣教を目的とする。日本へはクザン司教の招きで1898年熊本に入ったのが最初で、その後札幌・東京・神戸・奄美大島などにおいて、孤児・老人・ハンセン病施設などで活動した。1931年東京に聖母病院を設立している。

同会が一般病院の申し出を受け、マリ・ロベルト（アンヌ・マリ・エリザ・ルジュン）と4人の外国人修道女を横浜に派遣したのは1935年であった。病院での活動では、墮胎と不妊手術には関わらないことを条件としていたが、トラブルは複数あったようだ。

また、戦争中について、同会の年誌には、プロテスタントを含む聖職者や修道女の収容施設での生活、北海道や軽井沢への疎開などの詳しい記述がある。外国人修道女たちには「自分の宣教地を悪く言わない」という暗黙の了解があったことも分かる。一般病院関係者は、戦時下も1944年まで横浜に留まった。その後軽井沢に移り、診療所の手伝いをしながら終戦を迎えた。マリ・ロベルトは38年の日本での活動を終え、1973年フランスに戻り、1988年に帰天した。

④戦後に横浜司教区で活動した修道女会

『女性宣教師たち』では取り上げなかったが、戦前に来日、戦後早い時期から横浜司教区（神奈川・山梨・長野・静岡）で活動した会を4つ紹介する。

まず、シャルトルの聖パウロ修道女会である。17世紀にフランスで設立、1878年函館に初来日した。戦前に東京の修道院や孤児院の支部を子安に設け、藤沢に後の湘南白百合学園の前身となる学校を設立しているが、外国人修道女が活動したのは主に戦後である。

次は、聖体と愛徳のはしため礼拝修道女会である。19世紀に、若い女性の信仰と教養を培うことを目的に、スペインで設立された。1928年来日、東京で活動を始め、戦時中は軽井沢に疎開する。戦後すぐ横浜市に拠点を置いて女性や児童のための福祉活動をした。

3つ目は聖心侍女修道会である。19世紀にスペインで設立され、1934年来日、主に東京や神戸で活動し、戦時中は長野県に疎開した。戦後、横須賀米軍基地内に修道院を設立、後に鎌倉などに移転した。清泉女学院を開き、女子教育に大きな貢献をしてきた。

最後にクリスト・ロア宣教修道女会を挙げておこ

う。1928年カナダのケベックで、宣教と奉仕を目的に設立された。1933年来日、鹿児島や東京で活動し、戦時下は東京近郊などで外国人収容所を手伝った。戦後は全国で子どもや病者に奉仕、特に御殿場の神山復生病院の運営にあたった。

4 資料の所在

カトリック宣教関係の一次史料、すなわち宣教師の書簡・報告書類は、多くの場合、所属宣教会や修道会本部に保管されている。19世紀に日本で活動したのはフランス人が多い会であるため、史料の殆どはフランス語である。また、献金依頼などのために書いた書簡が、宣教支援団体や宣教師の故郷の神学校などで発見される例もある。いずれにしろ、公文書館とは異なり、一般公開されていないケースも少なくない。会の周年誌などは一次史料から丹念にまとめられたものが多い。

『女性宣教師たち』については、各会の歴史編纂に携わってきた修道女の方々のご協力を得て、様々な資料をご提供いただいた。改めて感謝である。

5 おわりに

浅学にして、日本再宣教を担った女子修道会の闇を光で照らすような地道な活動を十分に明らかにするに至らなかった。今後も、内外の記録収集に努め、女子修道会の日本社会への貢献を検証したいと考えている。



来日宣教師達の日本理解 (オリーブ・アイランド・ハジス 対セディ・リー・ワイドナー)

森山 みね子

ハジス（1877～1964）は主として横浜で宣教活動をした。1902（明治35）年9月に来日してメソジスト・プロテスタント教会（MPC）の宣教師として横浜山手居留地にある横浜英和女学校に派遣された。

MPCの教派としては横浜、静岡、名古屋といった東海道沿線に宣教の拠点をもっていた。ハジスは横浜に入ったものの1年間は名古屋で日本語を学んだ。横浜に戻り、英語の教師としてのみならず代数、幾何、物理、体操等を教えた。横浜での2年目にはもう校長をおうせつかった。女学生達の憧れの的となるハジスはその容姿の美しさのみ

ならず、教師としてのすぐれた資質と生徒達への公平な接し方が信頼の元となった。ハジスはもっと多くの生徒に伝道したいと思った。そのためには山手のこの土地は狭すぎると痛感した。ハジスは横浜の幾つかの丘を歩いて物色した。ここで現地の人々との接触があり、日本人との交渉術も身に着けていった。後述するワイドナーとの違いがこのあたりにも見られる。

さて、彼女の活動拠点は横浜西部の蒔田の丘になる。土地を購入して、学校移転は並大抵のことではなかった。しかし彼女はその地域に溶け込み日本人の心に触れていった。学校での働きは多岐にわたるが、校長としての任務は更に大きいものであった。学内ではもちろんのこと、保護者、及び学外での日本社会の人々との交わりにも意欲的であった。

日本の風物、文化にどの様に接して行ったかを知る幾つかの事例が残されているのでたどってみる。ハジスの来日の任務目的はキリスト教の宣教であるから様々な分野の人々と接触があり、自ずと日本文化に深い興味を示していった。

そんな中に最近、思いがけない話題が飛び込んできた。ハジスは宣教師たちと「盆景」のお稽古をしていたとのことである。『横浜の女性宣教師たち』を購読した横浜英和学院の卒業生Sさんから電話をもらったことから俄かに、話題がひろがった。

Sさんは成美学園時代の卒業生でハジスとの面識はない。盆景の師匠であった祖父と父の遺品からハジスの作品と思われるものが発見された。「オリブ アイ・ハジス様」と記名された作品である。昭和10年代の物と思われる。お盆に土を盛り、樹木のミニチュアが植えられ、森の形を造り、手前に鳥居、背景に富士山が配されている。「これは写真にされているもので、実物はその都度こわされてしまうものです。」と書き添えてあった。作品の写真の中にハジスの名前を発見して、Sは自分の学んだ学校のハジス先生と符合し驚きましたと種々な写真を添えて送ってきた。Sは成美学園の卒業生でありながら自分の祖父と父が宣教師達と交流が有り、趣味の世界で結びついていたとは全く知らなかったとのことである。

盆景の写真は戦時中に日の出町から保土ヶ谷に荷物疎開しておいた二階の遺品を最近整理していて、遭遇したものである。ハジスが盆景を手掛けたのは少なくとも75年以上まえのことではないかと

思われる。

次にハジスの興味をひいたものは日本の着物姿である。紋付の着物、羽織を召して卒業式に参列されているハジスの姿が卒業写真に見られ。彼女の身長と体型に合わせてあつらえたものであろう。長身のハジスが加わっている卒業写真は彼女たちの宝物となっている。

ハジスは皇室への敬意をもっていた。アメリカ合衆国にはない天皇制に関心をもち、当時の日本人の思考によりそっての事であったと言われている。日英米戦争が陰しくなり、英和女学校の英の字が使えなくなり、校名が成美学園と変更された。教育勅語と論語に典拠を持つことにハジスは全く違う観点から「美を成」とは女学校らしくて良いでしょうとコメントしている。

戦時下、外国人教師達は帰国したが残った者は抑留され、東京の収容所に入れられた。ハジスも収容されていた。この時のエピソードが『敵国の市民』にも見られる。たくさんの警察官に監視されている中「私達は逃げようなどと考えていないのに何故こんなに多くの警察官がいるのですか」とハジスが訊ねたところ、警察官は「私達はあなた方を守っているのです」との返答であった。ハジスは思わず「私達は皇族と同じなのですね」と。ハジスはかつて皇居の広場でおびた数人の警察官を目にしたことを思い出した。彼女の思考には皮肉もありながらユーモアもあり優しさを秘めている。

次に、ハジスと対照的な女性宣教師セデー・リー・ワイドナーについて、日本文化への接し方を見ていく。ワイドナーは1900（明治33）年来日して仙台市私立宮城女学校に着任した。米国リホームド教会外国伝道師として13年間仙台市の宮城女学校で校長を務めた。1913（大正2）年に宮城女学校を辞し、帰国した。経済的に豊かな女学生にはハングリー精神が乏しく、キリスト教を受け入れても、信仰がそだたないと嘆いていたと宮城学院誌に記されている。

1918年に再来日したワイドナーは独立宣教師として来日した。日本でキリスト教界の指導的立場にある諸氏と交わり、キリスト教の宣教に最も困難と言われていた西濃地方への伝道を神より命じられた使命と確信して岐阜県大垣に拠点を置いた。大垣市宮町1054番地にて大正7年「美濃ミッシヨ

賀川豊彦のキリスト教社会改造論

—共同体形成を目指して—

大野 剛

ン」の活動が開始された。

私立大垣基督教幼稚園も作り、地域での活動が始められた。美濃ミッションとして地域にキリスト教が受け入れられつつあった。教会、聖書学校も充実し、ここで学んだ学生達はキリスト教宣教の担い手となっていった。しかし昭和5年頃になると神社参拝が盛んになる。神社礼拝はキリスト教の宣教においては偶像礼拝だとしてワイドナーは大垣のクリスチャンたちに注意をはらった。クリスチャンの大人達の理解はやがてクリスチャンの子供たちにも浸透していった。公立学校として小学校の生徒を神社参拝に教師が引率するような時、美濃ミッションの親は子供達に早退するか欠席をさせた。昭和8年伊勢神宮参拝に必要な費用を積み立てることになるが美濃ミッションの子供達の3人がともに伊勢神宮参拝は偶像拝礼であるから参加できないと、したがって積み立てはしないと子供達の口からきくことになる。親を呼んで教師は聞きただす。校長にも同様な返答であった。町長も知るところとなり、こうして“美濃ミッション事件”村八分のようなことが発生したのである。

美濃ミッションの子供達の3人は停学を言い渡される。小学校に停学はないからこれは退学処分である。ここに助け船をだしたのが前述した横浜英和のハジスであった。

ハジスとワイドナーは宣教師同志として知り合いであったと思われる。美濃ミッション事件を宣教師達は心をいたため、3人の子供を美濃から引き離すすべを考えた結果、横浜英和に引き受けたのはハジスであった。2人の兄弟、及び1人の女兒は各々母子家庭の子供達で横浜に引っ越して、キリスト教主義の学校で学ぶことになる。横浜英和小学校には『つばさ』という学校小誌がある。3人の児童は作文を投稿している。転校の次第などでなく、「いばらの道」と題して、人の生き方に触れて書いている。

ワイドナーは1939(昭和14)年に健康上の理由で日本を離れるが太平洋上より天に召された。

さて、美濃ミッションはその後壊滅状態であったが、終戦を迎えるや進駐軍の進出により勢いを盛り返す。

現在、美濃ミッションは四日市市富田浜町に拠点を移して、石黒イサク氏が監督者で機関紙「聖書の光」を発行して宣教している。

はじめに

賀川豊彦(1888-1960年)はキリストの愛に生きようとした。誰もが人間として生きられるように、贖罪愛を実践して、社会を改造することを目指した。その過程で救われた者が他の人を救おうとして仕える時、神が働いてその人の愛を増幅させ、「真の共同体」が形成されるという信仰原則に到達したのではないだろうか。

キーワードとして「神第一」、「贖罪愛の実践」、「社会連帯意識」が挙げられる。

先行研究に見る賀川評価

賀川は、スラムの救霊活動に始まり、日本最初のゼネストの先頭に立ち、全国的な農村事業に取り組み、農業協同組合、生活協同組合、共済組合の基盤を確立した。戦時中は投獄されながら戦争回避に尽力した。戦後はマッカーサー総司令官に寄稿して日本国憲法に大きな影響を及ぼし、また農地改革や健康保険制度の整備に貢献した。この間彼は一貫して信仰を貫き、神の国運動を推進した。アメリカでは大衆伝道者として、ヨーロッパでは平和主義者としての呼び声が高かった。ノーベル文学賞、平和賞は2回ずつ推挙された。

しかしながら現代人にはほとんど記憶されていない。むしろ忘れられている。日本の思想史、社会運動史においても不思議なほど言及されていない。賀川についての先行研究は暫定的に次のように類型化される。

神学思想の枠組み

- ① a 広義の神学か b 狭義の神学か。(熊澤義宣)
- ② a 近代的自由主義神学か b 宗教改革的福音主義神学か。(雨宮栄一)
- ③ a 牧会型教会論か b 宣教型教会論か。(小川圭治)
- ④ a 修復的正義(共同体和解説)か b 応報的正義(刑罰代償説)か。(片野文彦)
- ⑤ a 社会運動家・起業家の立場か b 牧師・伝道師の立場か。(土肥昭夫)
- ⑥ a 日本的伝統的キリスト者の立場か b 西欧的近代キリスト者の立場か。(古屋安雄)

賀川のキリスト教思想体系(代表的な著作)

- ①神学：「基督伝論争史」、「神についての瞑想」、「キリストについての瞑想」
 - ②聖書学：「聖書社会学の研究」、「イエスの信仰とその真理」
 - ③哲学・倫理学：「純粋哲学原理」（訳）、「愛の科学」、「人格社会主義の本質」
 - ④経済学：「主観経済の原理」、「友愛の政治経済学」
 - ⑤社会学：「自由組合論」、「農村社会事業」、「協同組合の理論と実践」
 - ⑥歴史学：「宗教と資本主義の勃興」（訳）、「基督教社会愛史」（訳）
 - ⑦文学：「死線を越えて」、「太陽を射る男」、「一粒の麦」、「涙の二等分」
- その他：「生存競争の哲学」、「宇宙の目的」

ここでいうaのグループの立場は概ね賀川の主張の枠内に収まり、肯定的な解釈を表す。共有する概念の存在を認め、発展する部分をも理解しようとする立場である。熱心な「賀川教」信奉者はその先端にあるとあってよい。bのグループの立場は既存の枠組みを優先する。その先端は賀川の新しい提唱は容認しない。全体を俯瞰するとaかbかは明確に区別できず、個々の考え方はその狭間に位置づけられる。賀川自身の考えも二つの領域にまたがっていた。そのために様々な議論を呼ぶことになる。

賀川の代表的な著作を分類すると、純粋な神学は『基督伝論争史』に限られるといわれる。上記領域における著作はいずれも既存の学問領域には収まり切れない。文学の場合でいえば、純文学というより大衆小説、社会小説に属するものである。

賀川研究は賀川の没後、1960年代から本格的に進められてきた。前半の30年間は上記bグループに近い研究者により既存の枠組みを元にする議論が主流であった。牧師・伝道師が扱う社会問題という捉え方である。賀川の思想、業績そのものではなく、もっぱら『貧民心理の研究』に纏わる用語問題が中心であった。後半の20年余りは神の国運動論から協同組合論、福祉事業論、世界平和論などへ拡がりを見せてきた。協同組合関係者等からも関心がもたれるようになった。格差社会の拡大に伴い、現在進行中であるといえるだろう。

一方賀川自身は、日記、小説、詩文、記事、論考、論文、講演録など、膨大な記録を遺した。これを先行研究と重ね合わせると、次のような課題が浮かび

上がる。

- ①先行研究はいずれも各々の専門分野から議論されているが、賀川の業績を貫く信仰に言及されていない。賀川にとっては信仰が思想の原点であり、活動の動因であったのではないだろうか。
 - ②先行研究は多くは専門職、体制指導者の立場からの議論だが、賀川は一般大衆、貧困者の一人として発言し、実践した。指導者を対象とする制度運営のための議論に対して大衆を対象とした生活改善のための議論であったといえないだろうか。
 - ③先行研究はある特定の時点における特定の課題についての分析考察になるが、賀川は生命の尊厳を出発点とし、宇宙の目的を到達点とするグラウンドデザインを描いていた。その展開過程は、従来の様式を発展改善しようとするダイナミックなアプローチではないだろうか。
 - ④先行研究は近代個人主義の効果を前提とするが、賀川はむしろ中世、古代の共同体社会の意義に注目した。個人主義は発達すると他者との競争を助長し、奪い合いを招き、規格外の人間は排斥される傾向がある。共同体は多様性を認める体制であり、連帯により分かち合いと助け合いを促し、新しい付加価値を生み出す。賀川はそのような共同体社会を再建することにより、社会改造を果たそうと考えたのではないだろうか。
- 以上から今後の賀川研究には次のような課題が考えられる。
- ①賀川はどのようにして人格が形成され、信仰が確立されたのか。その信仰とはどのような神学に由来するのか、中核にはどのような事柄が据えられ、展開されたのか。またキリスト教思想として何を提唱したのか、それはどのように理解され、あるいは反論を招いたのか。
 - ②賀川はどのような運動を実践し、どのような実績を残したのかを確認したい。神戸のスラムにおける救霊救貧防貧運動、関東大震災被災地におけるセルツルメント活動、社会福祉事業、当初からの世界平和運動などである。それらはどのように推進されたのか。どのような問題に遭遇したのか。それには神の国運動、イエスの友会との関係、日本基督教会連盟、および経済社会情勢の動向を検証することが前提になる。
 - ③賀川の思想と業績の相互関係について。彼の活

動では信仰がすべての運動の土台となり、精神が各領域で活動する際の柱を成す。この土台と柱が形成する共同体とは何か。そこには今日の閉塞社会、格差社会を打開する鍵が隠されているのではないか。共同体の要件、機能、意義については他の組織体と比較検証をした上で、賀川という「社会改造」に至る道筋を解明する必要がある。以下に幾つかのポイントを取り上げたい。

賀川の人格・信仰・思想はどのように形成されたのか。

(賀川の人格形成と信仰形成)

賀川は幼くして両親と死別、人の愛に渴望していた。南長老派宣教師との出会いは神と人格者との出会いであり、人格社会主義への関心が高められた。明治学院神学部予科修了後の2年9ヶ月は、賀川の生涯の転換点であった。自殺願望者からスラム伝道者へと変えられたのは苦悩の中に神の愛を見出したからであった。賀川は社会的弱者が現実生きるためには信仰と共に社会的に救われるべきことを痛感した。

賀川は受洗後肺結核で2度重態に陥るが、神秘体験により回復した。それは「肉体の死の淵からの生還であったと同時に、宗教的霊的な再生の体験」であった。彼は内住の神を確信したのである。さらにスラムへ献身は彼の信仰を揺るぎないもの仕立て上げた。その経緯は『涙の二等分』に見ることができる。

(賀川のキリスト教思想)

これまでの研究ではまず『貧民心理の研究』が取り上げられるが、これは第1編7章5節「穢多村の研究」における彼の用語問題に集中する。用語には行きすぎが認められるが、全体を俯瞰すれば賀川思想の中核は「イエスの社会思想の中心を形づくるものは神の国であり、その神の国運動に愛という中軸をすえて展開したというところにあったというべきだろう。

イエスと社会改造の精神

賀川の魂の遍歴、信仰の成長過程を辿ると、それは個の魂の尊厳に始まり、神の国運動となり、協同組合運動へ、世界平和運動へと展開する。その中心に位置づけられるのは、聖書に描かれた神の国に由来する「神の国運動」である。賀川はそのような運動に係る人々と共に、社会の改造を進めようとした。

彼は「宗教運動の最終目的は神の国を求めるということである」といい、神第一の信仰を求めた。現実の社会状況を観察すると、問題は世の不条理のしわ寄せを受ける都市生活者に所在する。彼らは農村共同体から切り離され、金と機械に囲まれて生活しなければならない。その原因は生活不安、従属性（雇われねばならない）、孤立、流浪（よい収入を求めて）が競合することであるといい、処方箋として都市生活者は欲望を整理すること、すなわち人間をつくること、真の目的ある魂をつくることを提唱した。また分配は人格の平等に基づかなくてはならないこと、所有については所有の要求よりも創作の喜びを優先することを奨めた。これは一人ひとりが自己中心を捨てて、人のために尽くし、「愛のないところに愛を創作すること」を表す。ここに贖罪愛の実践を見ることが出来る。そして愛の組合運動としてのキリスト教が結論付けられる。

賀川は人を愛するところに神が存在する、実際に人を助けるとき、すなわち人の罪を許しもう一度立ち上がらせしめるとき、噴水のごとく湧き上がる愛が、社会改造の精神的動機であるという。人は人を愛するとき、神が働いてその人の愛を増幅させ、社会改造が進められるという神の愛のメカニズムである。これが賀川の探求した社会改造の原則であるといえるだろう。

小林功芳先生の思い出

花島 光男



初めて小林功芳先生とお会いしたのは1978年9月30日、元町の増徳院という寺院であった。この時、小林先生はヘボン顕彰会主催の第4回ヘボン祭で「横浜のネーザン・ブラウン」と題して講演された。ヘボン祭とは言っても小さな集まりで、主催するヘボン顕彰会も高谷道男先生の主治医であった大滝紀夫氏が主宰する集会の名称で、主に横浜の医師会や文芸懇話会の方々などの参加者が多かった。キリスト教界は教会よりも市内キリスト教学校の関係者が数名参加していた。小林先生は当時関東学院大学助教授で、すでに日本英学史学会でも活躍され、主に明治初期の来日宣教師な

どの研究に励まれていた。ネーザン・ブラウンの本格的な研究発表はおそらく小林先生が初めてであっただろうか。高谷先生は小林先生の研究発表を絶賛した。

丁度このころに、翌年のヘボン来日百二十周年記念行事の検討が始まった。高谷先生を中心に、ヘボン顕彰会など関係団体等の代表が集められ、事業について検討を開始した。そこに横浜市より市民グラフでのヘボン特集号の企画が持ち込まれたのであった。高谷先生と小林先生と私の三人が編集委員となり、1979年の夏は連日のように関内駅近くの横浜市広報センターに通った。そして10月に市民グラフ「ヘボンと横浜」特集号が発行された。そして、このグラフに執筆した方々を中心に横浜プロテスタント史研究会が発足し、小林先生はこの時に、また研究会の運営にも中心的役割を果たした。

小林先生は、精力的に研究活動を進め、主に横浜開港初期の宣教師、関東学院に関わるバプテストの宣教師についての調査研究が多くみられ、特にタッピング、ベニンホフなどについては詳しく、得意とする研究であった。これらは関東学院大学工学部の紀要「科学／人間」や日本英学史学会の「英学史研究」に発表されると共に、研究会においても発表、報告している。1984年に発行された『関東学院百年史』では関東学院大学の部分を執筆された。熱心な研究活動の最中、91年に胃がん手術をされ、さらに5年後に脳出血で倒れることがあった。生死の境を体験されながらも生命は取り留めたが、半身の麻痺、発声の苦勞などの障害を抱え、リハビリに時間と体力を奪われた。それでも研究活動は精力的に続けられた。この当時は毎月の研究会には奥様が車を運転して、指路教会までの送り迎えをされていた。

研究論文は纏められ「英学と宣教の諸相」として2000年に有隣堂より発行された。この本の最後「あとがきにかえて」で、先生は以下のように記している。

「願わくば、この書物が身障者の目にも触れて欲しい。一見、日本の社会は身障者の福祉を考えているかに見える。しかし、差別に苦しむ人が多いのが現実である。この「あとがき」を書いている私自身が、現に差別と戦っている。苦しい戦いであるが全障害者のためにも決して負けてはならない。障害者が私の仕事から励ましを得てくだされば幸甚である。」

身体の不自由と闘いつつも、研究活動に励まれた

小林功芳先生と奥様を横浜プロテスタント史研究会はいつまでも覚えておきたい。

小林功芳先生を偲ぶ

小林功芳先生は、横浜市曙町生まれの浜っ子です。早稲田大学第一文学部英文科を卒業、同大学院の修士課程を終えて、関東学院大学に奉職しました。著書には『関東学院百年史』（共著）があり、2000年には『英学と宣教の諸相』を有隣堂から出版しています。横浜プロテスタント史研究会の関係では、1981年創立当時からの会員で、その前に横浜市の広報室から出版した『ヘボンと横浜』の編集人の一人でありました。横プロ研編纂の『図説横浜キリスト教文化史』、『横浜開港と宣教師たち』においても中心的な働きをして下さいました。研究会には毎回出席、必ず質問をして司会者にとっては、大変助かる存在でありました。また『横浜プロテスタント史研究会報』の第一号から責任者として奉仕して下さい、1988年9月から始まり、今日も引き継がれています。

1996年4月19日、夜自宅において倒られ茅ヶ崎の徳洲会病院に入院、その後七沢の脳血管センターに移られ、リハビリに励みました。次第に回復に向かわれ、97年2月の例会に出席、その時から奥様のすみ子様の運転で、研究会に出席下さっていましたが、2015年イリーゼ湘南辻堂のホームに入られて間もなく訪れたときは、オリンピックを楽しみたいと意欲を燃やしていましたが、2016年2月19日に逝去されました。もっと早くこの会報に書くべきでありましたが、2年近くも遅れて掲載したことを心からお詫びしたいと思います。

（岡部一興）

【編集後記】

今年の10月の例会の時、横プロ研の役員についての話が中島耕二さんから出まして、すでに11月の研究会の案内には報告済みですが、中村早苗さんが役員に入られました。現在の役員は次の通りです。遠藤香、岡部一興、園木幸夫、中島耕二、中村早苗、花島光男。会計には遠藤、ホームページ担当には園木、代表を岡部がさせて頂いています。（敬省略）

（K.O.）